

# 詩

## 山武市指定文化財（無形民俗） 本須賀北京塚の獅子舞（本須賀）

創始は不明ですが、現存する獅子頭には元禄十六年（一七〇三）の記銘があり、柳の木の根から作られたものと伝えられています。

獅子舞は一時中断しましたが、大正元年に復活し、本須賀北京塚獅子舞保存会により伝承されました。現在は本須賀全地域から成る本須賀八坂神社獅子舞保存会に管理され、毎年七月に行われている八坂神社の祭礼時の祭神輿について行き、休憩場所にて神輿の前で獅子舞を披露しています。



本須賀北京塚の獅子舞

## 大根

市原市(元富口) 村上 久江

大根をきざむ

薄く うすくきざむ

さらに一枚一枚に左手を添え

右手に持った包丁で

とんとんとん やさしくきざむ

まな板のうえに溢れさす

台所につねに在り

わたしは女、母であり、妻で在った

手捌きよくきざんだ 丸く角も取った

大根にもちろん意志などない

食されるための存在として選ばれる

選ぶものと選ばれるものとの儚い均衡を見てしまうが

大いなる均衡のなかにわたしもまた選ばれたもの

昨日から今日へまた明日へと握る包丁の調べのなかで

その白く瑞々しい細胞を変容させていく

きりりと引き締まった生が好きで

刻みながらよく頬張ったものだ

滔々とながれる歴史の時間軸

食物を料理する役目を担うものたちが

煮て 炒め 漬物に酔の物にと

大根のその使い勝手の良さに惚れ

その変化を愛しみ親しんできた

大根をきざむ

とんとんとん

わたしの手のうねり

心のうねりは萎えてきたが

とんとんとん

## その人は

市原市(元富口) 村上 久江

烏や雀がほがらかに鳴き交し合い  
たんぼぼやイヌノフグリや名を忘れられた花々が  
瑞々しく生をきらめかす 駅までの小道

その人は「こんにちは」とぶつきら棒に  
見知らぬわたしに声を掛けて  
自転車で追い越してゆく

烏や雀が光や風の交錯するこの世の園に  
己の生を解き放つように  
その人もなつかしい人にも出逢ったように  
わたしに声を寄せたのだろうか

日々の出会いのささやかな声の便り  
わたしも「こんにちは」と その人の  
ふくらんだリュックの背に返す

## 人の世の交差点 駅

わたしは今日も精一杯の顔をつくり  
人々のなかにたたずむ

ローカルの電車が入ってくる  
乗客はそれぞれ静かにくぐもる

その人はイヤホンを耳にあて 時折

手と足で小刻みにリズムをとる

好きな曲でも聞いているのか その童顔に

幼い息子たちの面影を重ねる

その人はこのローカル線のどこかの駅で降り  
あるいは線を変えて  
どこかの職場に行き 何をしているのだろうか

## 百人塚

本須賀 川島 隆

集落の外れの夏草茂る中  
石文はひっそり立っている  
訪う人はほとんどいないけど  
元禄津波の供養塚  
九十六名眠ってる  
みんなその事忘れてる  
いつかは来るぞ大地震  
海まで二キロの供養塚  
百人塚と呼ばれてる  
九十九里浜の海鳴りを  
聞きつつ静かに眠ってる

## 雪の故郷

本須賀 川島 隆

冬来れば  
故郷の村を思い出す  
広い田んぼに囲まれて  
東に低い山並が  
西に大きな阿賀野川  
瓢湖に近く白鳥が  
飛来したとの故郷便り  
幼馴染みも住んでいる  
祖母父母妹が眠っている  
暖かい九十九里に六十年  
だけど古里忘れない  
元気なうちに帰りたい  
歩けるうちに帰りたい  
近くて遠い故郷へ

## 夜明け

森 遠藤三千代

暑い夜が明けた

外気が恋しくて

まだ 四時半

空に飛行機雲が

ぐんぐんのぼっていく

空の上は冷たいのだ

空気が流れている

あきもせず見上げる

これからどこへ

次の朝も空を見あげる

あつた

きのうよりもっと

垂直にぐんぐんのぼっていく

梅雨明けの空

薄いピンク色の空

今日もどんな暑さが

やってくるのか

私も乗りたい

あの飛行機に

三日目の朝

空を見あげた

おおなんと美しい

空一面 赤く染まっている

刻刻と変りゆく

この美しい空

心がおどる

明日はどんな空が

一日の終りに

森 遠藤三千代

陸地がなくなるのか

四季おりおりの

美しい花にあふれる日本

これもなくなるのか

そんな思いの一日

暑くて 暑くてと

クーラーの室にとびこむ

この星 この地球

どうなるのであろうか

暑き日の暮れ時

今日一日をふり返る

何をした

何を話した

何を考えた

暑い 暑いと

汗をたらたら

ガムの油じゃあるまいし

なぜこんなに汗まみれ

水分 水分

汗をかけばかくほど

欲しがる冷たいもの

この星この地球

世界中熱波におそわれている

氷山もとけ

海があふれ

## 卒業

木原 武藤 初夫

光に照らされた髪がしなやかにびく時

君のくちびるが新しい世界をかたる

時という空間が君の未来を約束してくれる

ただし自分で奏でるんだ

自分だけの曲を作るんだ

いろいろな音色の聞こえる君の歌を

そして音をおりなすその波動に身をゆだね

楽しむんだ

現在の<sup>いま</sup>空気を切り裂き君の素直な<sup>からだ</sup>身体を

精一杯見せるんだ

一杯のコーヒーの苦みが

君の欲望の全てを消し去ってくれる

君の勇気が耳元でそつとささやく

「よくやったね」

でも僕はわからない

このことがわかるのは友達と別れた時

今までの何気ない行いが骨身にしみる

その時ふと目が覚め月に向かつて叫ぶ

僕の苦しみは君の苦しみだったんだって

心の中に灯をともし

卒業 心につけた足跡は君の性格を知っている

朝の陽ざしが僕の胸に射す時

心の中で僕は君のところに行くよ

十年たっても二十年たってもかわらない

苦しい時、悲しい時、君と生活をした思い出が

僕の脳裏によみがえり楽しみにかえてくれるから

今のままの君が僕に投げかけてくれたぬくもりを忘れない

卒業 僕の心はみんなと繋がっている

いつまでも

## 一歩

木原 武藤 初夫

心の中に「ありがとう」って言おう

声を出そう

唇を動かそう

頭の中に一点の花が開く

山びこのように色々な人の動きが

言葉に重みをのせおみあげをもって

君の心に届く

そしたらニコッと笑って答えよう

「本当にありがとう」って

友達は君の微笑みを待っている

## 時のありか

森 佐藤美保子

一枚の景色を引き出し作ってる

久久に庭に立てば

枯草ばかり寒風にさらされて

花一輪の名残りもなく

誰に何を発する声もなく出ずに

病む身の侘びしさに

茫然としてこれもひとつの罪なるや

遠くの緑は団地に変わり久しく

桜並木と信号と

この町いちばんのゾーンとなり

あの町この町の通過点

車は行列の幹線道路に

旧道静かに昔のままに

時時人の行く駅迄の道

基幹バスのブルー鮮やかに生き生きと

町のシンボル客乗せて支えてる

道路と線路と田んぼと川

あの道は昔私の通いし道

若かった 山の白い花咲いて 私も咲いて

嬉し楽しかりし ひたすらひとすじに

気付けばこの地に根を埋めていた

世は変わり代も人も代わって七十年余

家並ひっそりと ただ淋し

今では店もなく 時のかけらもなく

かつての私を置いて 風が通り過ぎる

車並ぶどこも同じ駅前になり

電車の時間に合わせて車が動く

人を集める大きな所もなく

人を送った車は帰りを待つ繰り返し

汽車の時代の頭が錆びついたままの私

空<sup>カラ</sup>まわり 今はまぼろしの時のありかを

さまようばかりの古いひとり

## 半分の力

森 佐藤美保子

体は壊れ放題の身となり

何んとか十五分立てば限界に

新聞と本と共にベッドへバタン

繰り返し毎日 半分の力

リサイクル本 今年ももらって有り難し

シクラメンに水と太陽を「きれいだな」

フラフラ伝ってハイどうぞ一緒にお茶を

痛いを少し向こう側へ

年寄りのサジ加減して半分の力

部屋はどこも物だらけ 本だらけ

本の中で本捜し だらしない

掃除出来ず やらずで汚い

もう少し動けたらへ逃げる半分の力

自分が自分でなくなり堂堂とゴミの中

これでも頭はもう少し大丈夫とする

散歩は川の遊歩道

亀さん五匹会議中 私はりハビリ中

手押し車で一步半歩を三往復

電車が通って一枚の絵の景色に

明日も天気かな 夕食と弁当が相談中

早目に雨戸をギチバタと 半分の力

戸袋の下の大きな口が挨拶する

またあした 元気でネ

デイサービスは楽しみいっぱい

職員さんとボランティアさんに支えられ

華やか賑やかな芸にまったり浸って

時のたつのを忘れそう

今日も一日支えられ愛をいっぱいもらって

感謝だらけの温かい体にしてもらい

有り難う 幸せの夢の中

## 将来の夢は

東京都(元井之内) 山下 佳恵

人生そんなに甘くない

将来の夢は

サッカー選手!

メッシみたいな選手になって

華麗なドリブルスピード

伝説のサッカー選手になりたい

メッシの名言

努力すれば報われる?そうじゃないだろ

報われるまで努力するんだ

将来の夢は

プロゲーマー!

大好きなゲームで賞金稼ぎ

タワマンに住むことだって夢じゃない

好きなこととしてお金を稼ぐ

好きなことが仕事になるって理想だけど

将来の夢は

ユーチューバー!

インフルエンサーになって

ぼくが時代をつくっていく

ネタを提供しつづけていくのは楽じゃない

迷惑系ユーチューバーだけにはならないで

将来の夢は

将来の夢は

わくわくする夢を

自由に思い描ける未来であればいい

## マルハラスメントの怪

東京都(元井之内) 山下 佳恵

文章の終わりには マル

学校では そう教わってきた  
だけど

賞状

挨拶状

冠婚葬祭の手紙にはマルをつけない

祭事が何事もなくスムーズに終わりますように  
縁が切れませんように との思いからだ

マルを付けることは

前からの決まりごとのように思っていたけれど

歴史は意外と浅く

明治以降に多く用いられてきたそうだ

いま

SNSなどで文章の終わりにマルがついていると  
怒っているとか

威圧的だとか

怖いと感じる人が多く

マルハラスメントと言われている

文章の終わりには マル

学校では そう教わってきた  
なにも考えずに使ってきた

句点は小さなマル ○

文字だけの文章は

感情がなかなか伝わりにくい

マルは

いつのまにか

感情をあらわすようになっていた

ただ すみっこにおさまっているだけではなかった

アライグマラスカルの果て

埴谷 大掛 史子

庭先で咲き盛る

海棠の万朶の花の下を

のっそり歩くのはアライグマ

夜行性だから昼は見えない筈なのに

のどかな顔つきで

きれいだなあと見上げている

このケモノはわが家の敵

凍てついた夜が続いたころ

古い火鉢三つに三〇匹ずつ泳がせていた

メダカの親、子、孫たちを

一匹だけ残して食べ尽くした

餌となる生きものたちがみな姿を消した寒夜

竹藪の住処から庭を横切り

玄関先で夜な夜な犯行に及んだ

アニメ『アライグマラスカル』で人気者となり

飼ってみたものの成獣になると手に負えず

山野に放され繁殖力の凄さを見せつけた彼ら

出会ってもクマほど恐ろしくないので

作物を荒らされながら共存している

庭向ここの竹藪は年々広がり

そこに定住してこちらの庭も住処の一部

ほどなく身隠れる山姥を横目で見ながら

悠揚迫らず生きている

初冠<sup>ついで</sup>からつひに行く道へ——伊勢物語の旅

埴谷 大掛 史子

信夫摺の模様さながらかぎりなく私の心を乱します

と光源氏のモデルの一人源融による

〈みちのくのしのぶもぢずりたれゆえに乱れそめにし  
われならなくに〉

の歌の心映えを拝借して

恋路の闇を手さぐりつづけ

少年は人生の石段百二十五段目で老い患い

戻ることなき道と対峙する

つひにゆく道とはかねて聞きしかど

きのふけふとは思はざりしを

最後に行く道のことは聞いていたが

死の道が昨日今日に迫っているとは思わなかったなあ

春日野の若むらさきのすりごころも

しのぶの乱れかぎりしられず

若い紫草のように美しいあなた方は